

第41回信行寺佛教講座 ～親鸞聖人の「和讃」を学ぶ会（総説篇）～



令和6年5月18日（土）

多種多様な著作

親鸞聖人は関東時代から晩年にかけて、多数の書物を著す。それらは、漢文の素養がある対知識人を読み手として意識した漢語のものと、不特定多数のものを読み手として意識した和語のものとの2種類に大別できる。和語で書かれたもので例外的なものとして、声を上げて読むことを目的に著された「和讃」や、門弟たちに宛てた手紙「御消息」がある。

各著作の執筆時期

西暦	年齢	著作
1224	52	『顕淨土真実教行証文類』（略称『教行信証』）
1248	76	『淨土和讃』、『高僧和讃』
1250	78	『唯信鈔文意』
1252	80	『淨土文類聚鈔』
1255	83	『尊号真像銘文』（略本）、『淨土三經往生文類』（略本）、『愚禿鈔』、『皇太子聖德奉讃』

西暦	年齢	著作
1256	84	『如來二種回向文』
1257	85	『淨土三經往生文類』（広本）、『一念多念文意』、『大日本國粟散王聖德太子奉讃』
1258	86	『尊号真像銘文』（広本）、『正像末和讃』
1260	88	『弥陀如來名号德』

※執筆時期が不明なものとして、『入出二門偈頌』（80歳あるいは84歳）がある

代表的な漢語の著作

『顯淨土真実教行証文類』（全6巻）

通称は『教行信証』『本典』など。本書の「行文類」末尾に「正信念仏偈」が収められている。「正信念仏偈」は漢文で書かれた讃歌であるため、「漢讃」と呼ばれる。一方で和語で書かれた讃歌を「和讃」という。



「御消息」

親鸞聖人は関東時代の門弟たちと手紙（「消息」）のやり取りをしながら文章伝道を行った。現在、宗祖の御消息は全体で43通が確認されている。そのなかで時期が明らかな最初のもので建長3年（1251年、79歳）で、最後は文応元年（1260年、88歳）である。

代表的な和語の著作

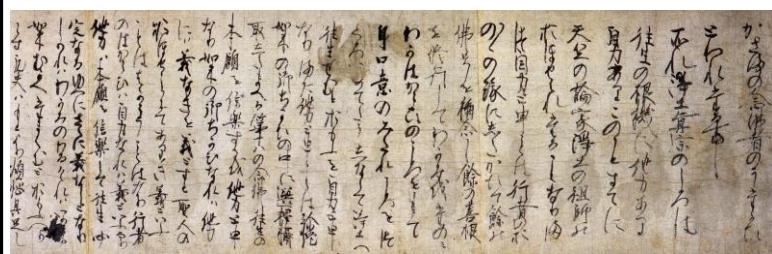
『一念多念文意』

法然門下の兄弟子である隆寛 [1148~1227] が著した『一念多念分別事』に引用されるる経論釈の重要な文に註釈を加え、一念・多念のいずれにも偏執しない念佛による往生の真意をあきらかにしたものである。



【重文 一念多念文意】

[鎌倉時代 (1257) , 京都・東本願寺]



【親鸞聖人消息】

[鎌倉時代 (1255) , 京都・東本願寺]

名号

親鸞聖人自筆の名号は現在7幅が確認される。六字名号「南無阿弥陀仏」、八字名号「南無不可思議光仏」、十字名号「帰命尽十方無碍光如來」のものがある。これらは門弟の求めに応じて書き与えたものと考えられる。



南無阿彌陀仏

【六字名号】
[親鸞筆,
鎌倉時代 (1256) ,
京都・西本願寺]

【紺地十字名号】
[贊親鸞筆,
鎌倉時代 (13世紀) ,
三重・專修寺]

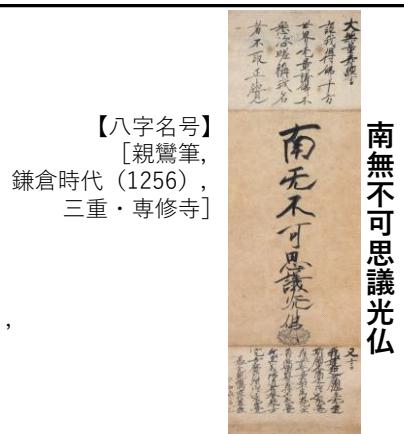


帰命尽十方無碍光如來



帰命尽十方無碍光如來

【十字名号】
[親鸞筆,
鎌倉時代 (1256) ,
三重・專修寺]



【八字名号】
[親鸞筆,
鎌倉時代 (1256) ,
三重・專修寺]

書写・編集・加点

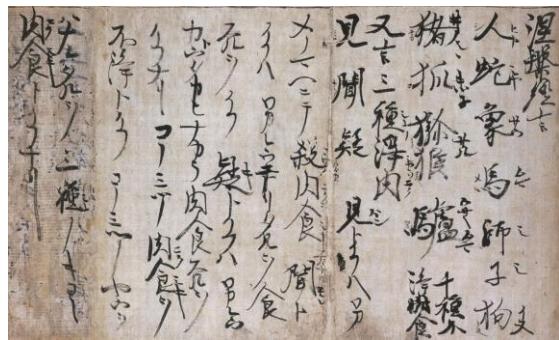
経典を書写し、注釈書を余白に書写した『觀無量寿經註』や『阿彌陀經註』、法然聖人の言葉や臨終の様子を編集した法然聖人の言行録『西方指南抄』、曇鸞大師の『往生論註』に朱や墨で仮名や註記を加えたものなどがある。これら4つは親鸞聖人自筆のものが現存している。



【国宝 阿弥陀経註】
[鎌倉時代 (13世紀) , 京都・西本願寺]

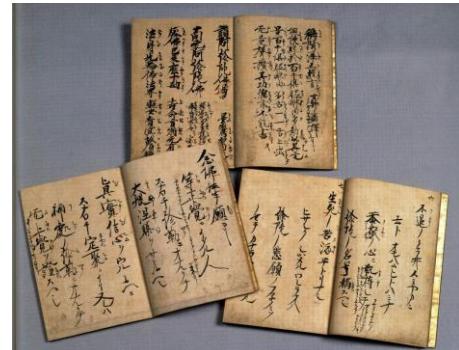
メモ書き

親鸞聖人がメモとして書写したと考えられるものが現存している。書写した『唯信鈔』の袋どじの折り目を切り離して、そこにできた紙背に経典などから抄出した文を書写した『見聞集』や、宗祖唯一の肉食に関する文言である「淨肉文」といったものがある。



【重文 淨肉文】
[鎌倉時代 (13世紀) , 三重・専修寺]

「和讃」



【国宝 三帖和讃】
[鎌倉時代 (13世紀) , 三重・専修寺]

和讃について

「和讃」とは和語で仏の徳をわかりやすく親しみやすくほめ讃えたものである。

七五調でリズム感があり、内容も平易で、覚えやすいものとなっている。これより親鸞聖人が民衆への伝道を意識していたことがうかがえる。聖人が作った和讃の数は540首以上にものぼる。和讃史において、個人が制作した現存量では最多。

和讃の歴史

和讃は、平安時代中期頃から和歌の制作が盛んとなるにつれて制作されはじめ、天台僧である千觀の『極樂國弥陀和讃』や、源信僧都と伝えられる『極樂六時讃』等が嚆矢（こうし）に位置づけられる。

爾来、浄土教系においてよく制作され、鎌倉時代に至ると隆盛期を迎えるが、宗祖の和讃もこうした流れの中に位置づけられる。

（『聖典全書』卷2、「三帖和讃解説」）

和讃の特徴

- ①和歌の七五調で作られている。
- ②四句一章の構成が多いが、比較的自由でとらわれない。
- ③和讃は仏前で唱えられる場合がある。
- ④和讃は経典や高僧の伝記などをベースにしたものが多い。

『極樂六時讃』（伝源信和尚作）

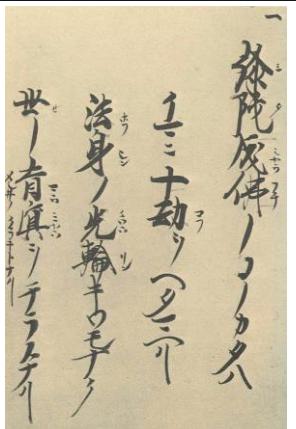
一子の慈悲平等に 他の利益そねます
法師のとがをあらはさず 深法空を愛樂し
他の恭敬ねがはず これらの功德えなへたり
昼夜につねにあひ見つつ これらの大師をともにせん
飯食すでにをはりては 座より立ちて経行し
おほくもすこしもおのが志志 処處に徘徊遊戯せむ

親鸞聖人の和讃の特徴

首尾一貫して、四句ずつで一章になっているものは極めて稀であり、しかも、原作者が四句を一単位として、何和讃何首とかいっている事は、管見においては全然ないのである。(中略)

連作の短歌のように組織する事は、親鸞聖人が創始されたものであろう。そして、この形式は親鸞聖人以後においても、その例は少ないのである。

(多屋頼俊『和讃史概説』取意)



聖教にもとづく和讃、力づよい作風

他の和讃が、浄土や来迎などについて美麗な修辞を駆使して詠出したものが多いのに対し、親鸞聖人の和讃は経・論・釈の文言に基づいた質実なものが多いといわれる。多屋頼俊氏は、命令調で「せよ」あるいは「べし」で終止している和讃が多いのも特徴といい、和讃全体に力強さを与えていたという。

諷誦のために制作

七五調の四句、と形式が決まっておれば、フシの付け方は簡単である。第一句を少しく上げて書いてあるのは調声の句であるからである。和讃は、先にも記したように諷誦を目的として作るものであるが、その諷誦をここまで具体的に考えて和讃を作られたことは、注目すべきことである。そしてこの点から考えると、聖人は和讃を作られる時に、あるフシをつけて自身で口ずさみながら書きつけておられたのではないか、とも想像せられるのである。

(多屋頼俊『和讃の研究』38頁)

「三帖和讃」

「三帖和讃」とは、『浄土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』をまとめた名称である。

- ①『浄土和讃』：「浄土三部経」を中心に阿弥陀仏とその浄土をほめ讃えたものである（全118首）。
- ②『高僧和讃』：七高僧の事績、著作、思想をほめ讃えたものである（全117首）。
- ③『正像末和讃』：浄土教が末法の時代やそこに生きる人々に相応した教えであることをほめ讃えたものである（文明本：全116首）。

聖徳太子和讃

和讃のなかには聖徳太子をほめ讃えたものもある。『皇太子聖徳奉讃』（全11首）, 『皇太子聖徳奉讃』（全75首）, 『大日本国粟散王聖徳太子奉讃』（全114首）など。

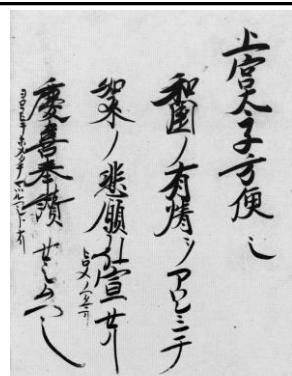


上宮皇子（じょうぐうおうじ）方便し
和国の有情をあわれみて

如来の悲願を弘宣せり
慶喜奉讃せしむべし

【現代語訳】

聖徳太子はありとあらゆる巧みな手段をもって、日本の生きとし生けるものがあわれんで、阿弥陀仏の本願を説きひろめた。このことを喜びほめ讃えよ。



赤松俊秀ほか編『増補 親鸞聖人真蹟集成』第3巻法藏館・2007年, p. 315.

「皇太子聖徳奉讃」

救世觀音大菩薩 聖徳皇と示現して

多々のごとくすてずして 阿摩のごとくにそひたまふ

【現代語訳】

救世觀音という偉大な菩薩は聖徳太子に身を変えて、父のように見捨てず、母のように寄り添う。



金子大榮『阿弥陀仏偈聴記』

少なくとも一日一回は仏前へ出て、そして正信偈和讃をあげるということ、それが法義相続ということになっているということであります。（中略）

我々は和讃を主として初重・二重・三重の念佛を申すのであると思っておりましたが、そうでなく、勤行の場合は初重・二重・三重の念佛の方が主であって、その念佛に添えて和讃を拝読するということでしょう。

明治14年～昭和51年
明治～昭和期に活躍した
真宗大谷派僧侶、仏教思想家。大谷大学名誉教授